

# がん社会 を診る

中川 恵一

胃潰瘍や胃がんの原因となるピロリ菌は日本人全体の約半数が、60歳以上では6〜8割が感染しています。でも20歳以下では10〜20%にすぎません。若い世代の感染率は減少の一途をたどり、現在ではほぼ欧米並みに低下しています。これにともない、日本でも胃がんは減少傾向にあります。

ピロリ菌は、免疫力が十分ではない幼児期に飲食物を介して感染し、そのまま胃にすみ着きます。冷蔵庫が普及して新鮮で清潔な食物を口にすることがなくなり、井戸水を飲むこともなくなり感染の機会が減っているのです。

逆に、衛生環境が悪かった明治・大正の昔は、ほとんどの日本人がピロリ菌に感染していたと思われます。たとえば、明治の文豪、夏目漱石が胃潰瘍で命を落としたことは有名な話です。漱石の胃潰瘍

## 漱石も悩ませたピロリ菌

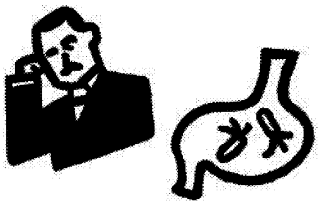
の原因がピロリ菌感染だったことは間違いありません。今なら、早い段階でピロリ菌除菌をしていたはずですが、漱石がもっと長生きすればどんな傑作が読めたかと思うと大変残念です。

1910年(明治43年)6月、43歳の漱石は東京・内幸町の長与胃腸病院で胃潰瘍と診断され、入院生活を送りました。ちなみに当時の治療法は腹部を2枚の熱したコンニャクで温めるというものでした。退院後に静養に出かけた伊豆・修善寺の旅館で吐血をして、一時は危篤状態に陥りました。その後も、繰り返し症状に悩まされた漱石でしたが、1916年(大正5年)、49歳で亡くなりました。

なお、胃潰瘍は最近まで手術で治す病気でした。がんを告知しなかった時代、胃がんは胃潰瘍と診断のうえ、手術されていました。黒澤明監督の名作映画「生きる」でも末期がんの主人公が軽い胃潰瘍と言われる場面があります。

ピロリ菌に感染すると、慢性の胃炎が起こり、胃潰瘍や十二指腸潰瘍の他、胃がんもできやすくなります。ピロリ菌の感染者は、非感染者より胃がんのリスクが5〜10倍も高くなります。保菌者全員が胃がんになるわけではありませんが、感染がなければ胃がんの危険はほとんどなくなります。ただし、ピロリ菌による炎症でこの菌もすめないほど胃粘膜の萎縮が進むと、感染検査でも陰性になることがありますから、要注意です。

(東京大学病院准教授)



イラスト・中村 久美